

続・ 珈琲の思い出 26

鈴木 優子

「はい、あーん」

優子が酔の物を自分の箸で和樹の口に運んでやると、和樹は目を細めて嬉しそうに頬ばり、それからすぐに

「すっぱくい!!」と目を寄り目にして、おどけてみせた。

優子がまたしてもケラケラと楽しそうに笑い、体を一瞬和樹の方に寄せた瞬間、フワリと柑橘系の香水のいい香りが漂い、和樹は思わず興奮してしまった。

ああ、このまま優子を抱き寄せたい！

でも、そんなことをしても許されるだろうか？

冴えない中年のただのエロオヤジと思われてしまうのではないか？

やっぱりこんな清楚でかわいらしい優子にそんなよこしまな気持ちを抱いてはいけない、

和樹がそんなことを悶々と考えていたところ、

こともあろうに、なんと優子の方から和樹に身を寄せてきたではないか。

和樹の左肩に軽く頭を持たせかけながら、

「もう、和樹さんたら、ホント面白ーいー」と優子がケラケラと笑う。(続く)